日本人と暦と言霊と

令和２年７月　藤代歴史愛好会　石山博

１．メソポタミアって・・・何？
突然ですが、世界４大文明をご存知ですか。

中国　インダス　エジプトは
国の名前でよく聞きますがソポタミアって
どんな意味があるのでしょうか。

実は、「中国」という意味があります。

４大文明は、それぞれ川の名前とセットで、
中国文明は、黄河
インダス文明は、インダス川
エジプト文明は、ナイル川
メソポタミア文明は、チグリス・ユーフラテス川
なんだか長い名前ですね。
それは、２つの川の名前だからです。

メソポタミアとは、現地の言葉で、「大きな川にはさまれた真ん中の土地」という意味だそうです。
つまり・・「中国ちゅうごく」　ということです。

実は、隣の国の中国も、元は　「黄河と長江にはさまれた真ん中の地」という事だった。
ということだそうです。共通しています。

そう言えば、日本にも中国というところがあります。
それは、中国地方です。

しかし　大きな川にはさまれた真ん中の土地には見えません。

なぜ日本の中国地方は、中国なのでしょうか？。

２．なぜ日本にも中国があるのでしょうか。

　大きな川と川にはさまれていないのになぜ中国というのでしょうか。
そのヒントは、近畿地方にあります。

その意味は、

　近→近い
　畿→お城
「王様のいるところ」　・・・だからです。

むかしは、奈良・京都からみて遠い国なので、
九州のことを「遠国おんごく」と読んでいました。

それで、近くの国と遠い国の間なので、
中国と呼ばれるようになったといわれています。

ここで、疑問が出てきます、「遠い国は近畿から見て西にしかないのか」ということです。

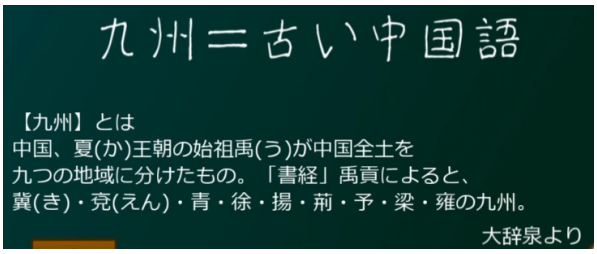
例えば、東の方向
関東地方を「遠国」、東海地方を「中国」と呼ぶことだって
考えられたはずです。

この疑問を解決する仮設は、
　仮設その１・・当時近畿地方は、国の東の端にあった。

つまり　今の鈴鹿山脈が国境であり
そこから　東は、外国だった。
と考えると「遠国おんごく」は西にしか
なかった事になります。

３．九州の意味とは・・

　実は、九州は、古い中国語なんです。
その意味は、「王が九つの地域に分けて
支配した事に由来する。」
ということなのです。



仮設その２・・そうすると　九州には、その昔　王国　があった？。

そうなると、近畿は「王様のいるところ」なので、
九州にも「王国」があったと考えると。
王国と王国にはさまれた真ん中の土地なので、「中国」地方と呼ばれるようになったと考えられます。

日本に、２つの王国があったと考えると
思いつくことがあります。

むかし日本は、「倭国」と呼ばれていた。それがいつの間にか「日本」と呼ばれるようになりました。もしかしたら、「倭国」と「日本」は別の国だったのかも知れません。

九州が「倭国」で、近畿が「日本国」だったのかも知れません。
<u>実際、中国の古い書物　「旧唐書」には、倭国伝と日本国伝が両方載っていて、別の国として書かれています。</u>

「解説・資料編」

解説：遠国（おんごく、えんごく）とは、律令国の等級区分の一つである。古代日本の律令制の下において、地方行政区画の一環として、畿内からの距離によって国を分けた。その結果、「遠い位置にある国」が遠国とされた。出典: ウィキペディア

解説：令制国の成立は、昭和 42 年（1967 年）12 月、藤原京の北面外濠から「己亥（つちのとい、きどのいのしし、きがい）年十月上捄国阿波評松里□」（己亥年は西暦 699 年）と書かれた木簡「上捄国（現千葉県）阿波評（安房地方）の松里とある。よみ：かずさのくに　あはのこほり　まつのさと：右図」が掘り出され郡評論争に決着が付けられたとともに、『日本書紀』にある大化の改新の諸政策は後世の潤色であることが判明しており、多くの令制国が確実に成立したと言えるのは、大宝元年（701 年）に制定された大宝律令からである。出典: ウィキペディア

解説：『旧唐書くとうじょ』には、
読み下し文（部分）
・倭国伝には次のようにあります。「注 ：倭国はいにしえの倭奴国のことである。」
・また日本国伝には次のようにあります。「日本国は倭国の別種である。」
　「日本は古くは小国だったが、倭国の地を併合した。・・・とあります。

注：倭国はいにしえの倭奴国のことである。
「読み：倭・・ワ(呉)(漢)wo　倭・・イ(呉)(漢) wei 」

注：九州志賀島出土の「漢委奴国王印（かんのいどこくおうのいん）があります」
読み方：宗主国＋国名＋官号　→漢＋委奴国＋王
読み：委・・イ(呉)(漢)　奴・・ド(漢)ヌ(呉)
2019.2.4　BS-TBS にっぽん！歴史鑑定　　福岡市博物館　米倉秀紀

解説：『旧唐書くとうじょ』倭国伝・日本国伝に、倭国は「貞観 22 年（648）の上表」が最後になり、日本国は、「長安 3 年（703）の粟田真人が来朝して国の特産物を献上した」事が、朝貢の最初になっていますので、648 年～703 年の間に、国の盟主が交替したと考える事ができます。701 年には、大宝律令が完成し、国の行政区域も評から郡へ変更され、国郡里制が成立した。事が読み取れます。

資料：『旧唐書くとうじょ』倭国伝・日本国伝　読み下し文（部分）

倭国
倭国はいにしえの倭奴国のことである。唐の都の長安を去ること 1 万４千里。新羅の東南の大海の中にある。倭人は山ばかりの島に依り付いて住んでいる。倭国の広さは東西は５か月の旅程で、南北は３か月の旅程であり、代々中国と通じていた。その国の町などには城郭が無く、木で柵を作り、家の屋根は草で葺いている。四方の小島五十余国は皆、倭国に属していた。倭国の王の姓は阿毎（あま・あめ）氏で、一大率を諸国において検察させている。小島の諸国はこれを畏怖している。制定する官位は１２等級ある。訴訟する者は匍匐（ほふく）して前に出る。倭国には女が多く、男は少ない。かなりの漢字が通用している。俗人は仏法を敬っている。人々は裸足で、ひと幅の布で身体の前後を覆っている。

貴人は錦織の帽子をかぶり、一般人は椎髷（さいづちのようなマゲ）で、冠や帯は付けていない。婦人は単色のスカートに丈の長い襦袢を着て、髪の毛は後ろで束ねて、２５センチほどの銀の花を左右に数枝ずつ挿して、その数で貴賤が分かるようにしている。衣服の制（つくり）は新羅にとても似ている。

貞観５年（631）。倭国は使いを送って来て、地方の産物を献上した。
太宗は道のりが遠いのをあわれんで、所司（＝役人）に命じて毎年朝貢しなくてよいように取りはからわせ、さらに新州の刺史（しし＝長官）高表仁に使者のしるしを持たせて倭国に派遣して、てなずけることにした。ところが表仁には外交手腕がなく、倭国の王子と礼儀の事で争いを起こして、国書を述べずに帰国した。貞観 22 年（648）になって、倭国王は再び新羅の遣唐使に上表文をことづけて太祖へ安否を伺うあいさつをしてきた。

日本国
日本国は倭国の別種である。その国は日の昇る方にあるので、「日本」という名前をつけている。あるいは「倭国がみずからその名前が優雅でないのを嫌がって、改めて日本とつけた。」ともいう。またあるいは「日本は古くは小国だったが、倭国の地を併合した。」とも。その日本人で唐に入朝する使者の多くは尊大で、誠実に答えない。それで中国ではこれを疑っている。

彼らは「我が国の国境は東西南北、それぞれ数千里あって西や南の境はみな大海に接している。東や北の境は大きな山があってそれを境としている。山の向こうは毛人の国である。」と言っている。長安３年（703）、その大臣の粟田真人が来朝して国の特産物を献上した。朝臣真人の身分は中国の戸部尚書（租庸内務をつかさどる長官）のようなものだ。彼は進徳冠をかぶって、その頂は花のように分かれて四方に垂れている。
（進徳冠…唐の制度の冠の一つで九つの球と金飾りがついている）紫の衣を身に付けて白絹を腰帯にしていた。真人は経書や史書を読むのが好きで、文章を創る事ができ、ものごしは温雅だ。則天武后は真人を鱗徳殿の宴に招いて司膳卿（しぜんけい・食膳を司る官）を授けて、本国に帰還させた。
開元の初め（玄宗の時代・713～741）また使者が来朝してきた。その使者は儒学者に経典を教授してほしいと請願した。玄宗皇帝は四門助教（教育機関の副教官）の趙玄黙に命じて鴻盧寺で教授させた。日本の使者は玄黙に広幅の布を贈って、入門の謝礼とした。その布には「白亀元年の調布（税金として納めたもの）」と書かれているが、中国では偽りでないかと疑った。

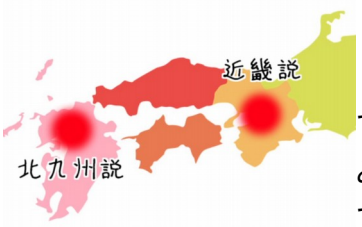
日本の使者は唐でもらった贈り物を全部、書籍を購入する費用に充てて、海路で帰還していった。その副使の朝臣仲満（阿倍仲麻呂）は中国の風習を慕って留まって去らず、姓名を朝衡（ちょうこう）と変えて朝廷に仕え、左補闕（さほけつ・天子への諫言役）、儀王（第１２王子）の学友となった。朝衡（仲麻呂）は京師に50年留まって書籍を愛好し、職を解いて帰国させようとしたが、留まって帰らなかった。
天宝12年（753）。日本国はふたたび使者を送って朝貢してきた。（※藤原清河・大伴古麻呂・吉備真備ら）上元年間（760～762）に朝衡を左散騎常侍（天子の顧問）・鎮南都護（インドシナ半島北部の軍政長官）に抜擢した。
貞元20年（804）。日本国は使者を送って朝貢してきた。学生の橘逸勢（はやなり）・学問僧の空海が留まった。元和元年（806）。日本国使判官の高階真人は「前回渡唐した学生の学業もほぼ終えたので帰国させようと思います。わたくしと共に帰国するように請願します。」と上奏したのでその通りにさせた。
開成４年（839）。日本国は再び使者を送って朝貢してきた。

４.魏志倭人伝という書物
　倭人　邪馬台国　卑弥呼　は、古代史に興味ない人にも知られている程ですが、どれも魏志倭人伝に登場する言葉です。
教科書には、魏志倭人伝と載っていますが、これは俗称で、「三国志　魏書第30巻　烏丸　鮮卑　東夷伝　倭人の条というのが正式です。

そこに　邪馬台国の女王卑弥呼が、魏の国に貢物して、お返しに親魏倭王という称号と金印をもらった。ということが書いてあります。
３世紀前半の中国は、魏・呉・蜀の３つの国に分かれていて、倭国は魏と付き合っていた。

日本の中で最も有名な古代都市、邪馬台国は未だにどこにあるのかわかっていません。
有力なのは、近畿説と北九州説ですが、それ以外に四国説や沖縄説など日本中に候補地が広がっています。

もともとは、邪馬台国は、大和の国で間違い無しといわれていましたが、江戸時代の有名な学者新井白石が「九州にも山門やまとあり！」といい出してそれ以来論争が続いています。



１９４０年代には、宮崎康平氏が「まぼろしの邪馬台国」１９７０年代には、古田武彦氏が「邪馬台国はなかった」を出版して空前の邪馬台国ブームが起こりました。
みんな邪馬台国を探したのですが結局はわからないままとされています。

邪馬台国がわからない原因は、日本の歴史書に全く姿を表さない点です。
では　日本の歴史書には、日本のことがどう書かれているのでしょうか。
古事記と日本書紀は、７００年代はじめにできた書物ですが、なぜ同時期に２つの書物を作ったのか？、今でもわかっていません。
どちらも　神話時代～ヤマト朝廷初期の天皇家の歴史を描いています。

５．天皇家の苗字
ところで天皇家は、日本で唯一苗字を持たない一族です。
でも最初からなかったとは考えられません。
いったい天皇家の苗字は何だったのでしょうか。

古事記によると最初の神様は、天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）、伊勢神宮に奉られている始祖神は、天照大神（あまてらすおおみかみ）、随の国に遣隋使を派遣したのが、阿毎多利思北孤（あめのたりしほこ）で、初期の天皇家では、あま（あめ）を名乗る人が多くみられます。
もしかしたら天皇家の苗字は、あま（あめ）だったかも知れません。

もともと苗字は、地名を名乗るのが普通で、清水の次郎長は、清水村の次郎長さんで、室町幕府をひらいた足利尊氏は、足利地方の尊氏さんとなります。
もし天皇家苗字が「あま」だったとしたら、その故郷は「あまくに」という事になると考えられます。

そう言えば天照大神（あまてらすおおみかみ）の住む場所は、高天原（たかまがはら）でした。「天」と言う言葉は美称で、実際は「海部あま」と考えられ、天皇家の故郷は海に近い「海峡国家」だったのではないかと考えられます。
そこを守る氏神様（その土地に住む人達を護っている神様）が、天神様です。

菅原道真公（すがわらみちざねこう）を奉るようになってからは、学問の神様となりましたが、それ以前は「天国あまくに」を護る神様だったと考えられます。
天皇家は、唯一無二の一家になったので苗字がなくなったのです。

解説：本来、天神とは国津神に対する天津神のことであり特定の神の名ではなかった。
天津神・国津神（あまつかみ・くにつかみ）は、日本神話に登場する神の分類である。
大国主など、天孫降臨以前からこの国土を治めていたとされる土着の神（地神）を「国津神」、天照大神などがいる高天原の神を「天津神」という。
出典: フリー百科事典ウィキペディア

６．伊勢神宮の正式名称

天照大神（あまてらすおおみかみ）は、伊勢神宮に奉られています。
伊勢神宮というのは俗称で、「神宮」が正式名称です。
明治になってから明治神宮や平安神宮など多くの神宮ができて、それらと区別するために「伊勢神宮」といいますが、それまで明治以前は、神宮といえば「伊勢神宮」しかありませんでした。

天皇家と同じ唯一無二（オンリーワン）の存在だったのです。
だから今でも「神宮」が正式名称なのです。

ところで天照大神（あまてらすおおみかみ）は、どうして始祖神になったのでしょうか。
日本のアダムとイブは、伊弉諾神（いざなぎのみこと）伊邪那岐命（いざなみのみこと）で、天照大神（あまてらすおおみかみ）はその子供で、三貴神（天照大神 、月読命つくよみのみこと、須佐之男命すさのおのみこと、）の一人として、高天原を治めていました。

その孫が、天孫降臨した瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）です。
その息子が浦島太郎のモデルとなった山彦（山の神）で、その孫が初代の天皇となった神武天皇です。天照大神（あまてらすおおみかみ）は神武天皇にとっては偉大なご先祖様だったのです。

実は魏志倭人伝に登場する卑弥呼は天照大神だったという（安本美典氏の）説があります。
確かに共通点は多い（女帝、弟がいる、いなくなったら世が乱れた・・など）です。

しかし、一つだけ困った事実があります。
日本書紀の中で唯一天皇でもないのに帝紀（ていき：天皇あるいは皇位継承を中心とする古代の伝承または史書)をたてられている人物がいます。
それは１５代応神天皇の母である神功皇后（じんぐうこうごう）です。
その神功皇后の記録の中に卑弥呼と云う名前を削った倭人伝の文章がそのままコピ−＆ペーストされています。
つまり日本書紀を書いた人物は、確実に魏志倭人伝を読んでいる事になります。

もし天照大神と卑弥呼が同一人物だったなら天照大神の実績として書けばいいし、天照大神と卑弥呼が同一人物なら卑弥呼という名前を隠す必要もないと思われます。
つまり中国の歴史書に出てくる卑弥呼が誰なのか当時の日本人にはわからなかったという事になります。（もしくは、違う王朝の人物だったために隠した可能性もあります。）

「解説・資料編」

解説：「古事記・日本書紀」神話の中で「イザナギとイザナミ」の国産み神話の島々は瀬戸内海を含む日本海側の西日本エリア（佐渡島含む）となっています。
（解説：天の◯◯という古名をもつ対馬海流上の島々）

　つまり「古事記・日本書紀」はこの西日本エリアの出来事であり、この時点での王権（王朝）の勢力範囲と考えると現実的です。
だから日本書紀の国産みの島々も時代で変化していると思われます。

　実は、神話の中で天降(下)りは三回（新羅、出雲、筑紫）ありますが、三回ともこのエリア内です。高天原から天降る際に中継地なしに直接に舟で行けるところと考えると「朝鮮半島南部・壱岐・対馬」のどこかもしくはこの領域が、 高天原（アマ国）かもしれません。 アマ国から下るからアマ下りです。ちなみに壱岐には天ケ原（あまがはら）海水浴場があります。(解説：天降りの場所と国産み神話)

『古事記』、『日本書紀』を国産み順に比較したものである。

古事記	日本書紀					
	本文	一書第1	一書第2	一書第3	一書第4	一書第5
淡道之穂之狭別島	淡路洲	大日本豐秋津洲	淡路洲・淡洲	淡路洲	淡路洲	淡路洲
伊豫之二名島	大日本豐秋津洲	淡路洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲	大日本豐秋津洲
隱伎之三子島	伊豫二名洲	伊豫二名洲	伊豫洲	伊豫二名洲	伊豫二名洲	淡洲
筑紫島	筑紫洲	筑紫洲	筑紫洲	億岐洲	筑紫洲	伊豫二名洲
伊岐島	億岐洲・佐度洲	億岐三子洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲	吉備子洲	億岐三子洲
津島	越洲	佐度洲	越洲	筑紫洲	億岐洲・佐度洲	佐度洲
佐度島	大洲	越洲	大洲	壹岐洲	越洲	筑紫洲
大倭豐秋津島	吉備子洲	吉備子洲	子洲	對馬洲		吉備子洲
吉備兒島						大洲
小豆島						
大島						
女島						
知訶島						
兩兒島						

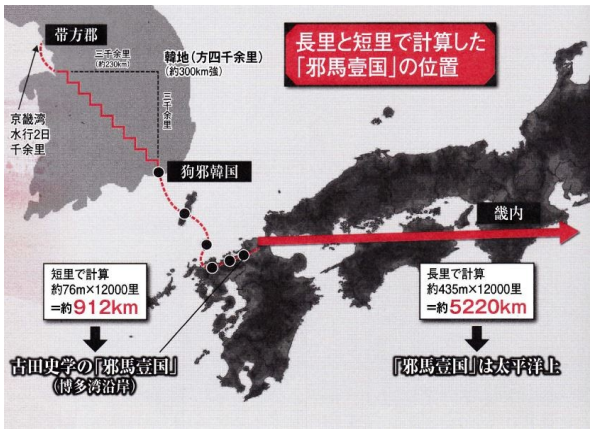
解説：天降りの場所
①日本書紀：第六段一書第一、素戔嗚尊「筑紫の州に降らしむ。」
②古事記：事代主神の服従、建御雷の神「出雲国の伊耶佐の小浜に降り到りて」
③日本書紀：第八段一書第四、素戔嗚尊「新羅の国に降到りて、曽尸茂梨（そしもり）の処に居す。」

解説：古事記の国産み神話（天の～という古名をもつ対馬海流上の島々）
隠伎之三子島　おきのみつごのしま：隠岐島　別名は天之忍許呂別　あめのおしころわけ
伊伎島　いきのしま：壱岐島　別名は天比登都柱　あめひとつばしら
津島　つしま：対馬別名は天之狭手依比売　あめのさでよりひめ
女島　ひめじま：姫島　別名は天一根　あめひとつね
知訶島　ちかのしま：五島列島　別名は天之忍男　あめのおしを
両児島　ふたごのしま：男女群島別名は天両屋　あめふたや

解説：『魏志倭人伝』
西晋の陳寿により 3 世紀末（280 年（呉の滅亡）-297 年（陳寿の没年）の間）に書かれ、陳寿の死後、中国では正史として重んじられた。

読み下し文（部分）
・倭人は帯方の東南大海の中にあり、山島に依りて國邑をなす。旧百余國。漢の時朝見する者あり、今、使譯通ずる所三十國。（略）　南、邪馬壹國に至る、女王の都する所、水行十日・陸行一月。（略）郡より女王國に至る、萬二千余里。

解説：原文に「到其北岸狗邪韓國，七千餘里」とあります。女王國まで、残り五千余里ですので、 魏志倭人伝をそのまま素直に読めば北九州（博多）あたりまでしか行けない計算になると思います。



解説：『魏志倭人伝』の「邪馬壹國に至る、女王の都する所」と『後漢書東夷伝』の「その大倭王は邪馬臺国に居る。」について、邪馬壹國はエリア（例えば東京都）であり邪馬臺国はポイント（例えば皇居）を指すものと考えられます。
『魏志倭人伝』のころは、天子を指す言葉として「臺」を使用しており、天子に合うことは「臺に詣でる」とあります。なお国名の「邪馬壹國」は『魏志倭人伝』だけで使用されています。現在残っている版木全てが、「邪馬壹國」となっているとのことです。

解説：日本紀と日本書紀は同じか
『日本書紀』の成立は 720 年と言われています。
『続日本紀』は次のように書いています。
(元 正)養老四年(720 年)五月、是より先、一品舎人親王、 勅を 奉りて『日本紀』 を 修む。 是に至り 功成り奏上す。 紀三十巻、 系図一巻。『続日本紀』
『日本書紀』は元正天皇の養老四年(720 年)に成立し たといいます。
ところがここには 『日本紀』とあります。 『日本書紀』ではありません。 『日本紀』と『日本書紀』は同一なのでしょうか。
「日本の歴史学」ではこれを同一とみなし て 『日本書紀』の成立を 720 年としています。

岩波書店の『日本書紀』の「解説」でも『日本紀』と『日本書紀』は同一で あるとして、両者の関係について次のように解説しています 。
『日本書紀』は『日本紀』ともいう 。その命名の由来や、二つの名前の関係については、古来いろいろの説があって、まだ決着していない。

一般に行われている説は、伴信友が『日本書紀考』において述べ たものである。かれは言う。『日本紀』が本来の名である。その理由は、(中略)『続日本紀』に「修日本紀」とあり、『続日本紀』以下の国史の名がみな『日本紀』をとって、『日本書紀』をとっていないことから明白である。と

つまり『日本紀』が本来の名であるが、書名がいつ『日本書紀』となったかはわからない。が、『日本紀』と『日本書紀』は同一である。と言っているわけです。疑問が残ります。

解説：伴 信友（ばん のぶとも、安永 2 年 2 月 25 日〈1773 年 3 月 17 日〉 - 弘化 3 年 10 月 14 日〈1846 年 12 月 2 日〉）とは、江戸時代後期の国学者。

７．古代の人は長生きか

初代の神武天皇は、１３７歳まで生きたと古事記に書かれています。
とんでもない長寿だと思います。

初期の頃は、１００歳以上生きた人は珍しくありません。

１代	神武天皇　１３７歳	１０代	崇神天皇　１６８歳
６代	考安天皇　１２３歳	１１代	垂仁天皇　１５３歳
７代	考霊天皇　１０６歳	１２代	景行天皇　１３７歳
		１５代	応神天皇　１３０歳

とても実年齢とは思えません。
その理由として、「朝廷の歴史を古く見せるために年齢を創作した。」と云われていますが、どうも不思議です。

歴史を古く見せるためなら、崇神天皇　１６８歳　もリアルではないのだから　５００歳とか１０００歳とか書いても良いはずです。
ところが最長でも崇神天皇の１６８歳です。何か他に理由があるのでしょうか。

仮設があります。それは、「２倍年暦」という考え方ですです。
かつての日本（倭）は、今の半年で１年と数える暦を使っていたというものです。
その痕跡は、今も残っていて、例えば
①「大晦日（１２月３１日）全国の神社で行われている「大祓おおはらえ」１年間の罪と穢（けがれ）を祓う行事があります。
実はこの「大祓おおはらえ」の行事は６月３０日にも行われています。
②日頃のご挨拶も、盆と暮の２回しています。

もし「２倍年暦」を使っていたとしたら最も長く生きた崇神天皇の１６８歳も８４歳となって長寿としておかしくない年齢になります。

また聖書によりますと、アダムは９３０歳、ノアの方舟で有名なノアは９５０歳まで生きたといいます。ありえない長寿と云えますが、これも月の満ち欠けの２８日で１歳と考える暦を使っていたと考えると今の７０歳代になります。（いわゆる１２倍年暦）
「こよみを制した者が王になる！」そんな格言があるように、むかしの王様はみんな暦を自分のものにしようとしていたといわれています。

「解説・資料編」

解説：「正確な暦」は正当な帝王の証
古代中国の帝王は「天子」と呼ばれました。天子は天帝の子を意味する言葉。天帝の子である天子は地上の国を統治するのみならず、天上を巡る日月星辰まで支配するものと考えられました。日月星辰を支配する以上、天子は日月星辰の運行も正確に把握しているはず。暦は日月星辰の運行を表すものでありますので、正当な天子であれば正しい暦を作ることが出来るのが当然です。こうした考えから古代中国では正しい暦は、帝王の正当性の証であると考えられました。
解説：日月星辰（じつげつせいしん）太陽や月、星などの天体が交わるところ。天空。

解説：大祓詞・大祓式（おおはらえしき）とは:　毎年旧暦の六月と十二月の晦日（みそか）に御所の朱雀門（すざくもん）で行われた「大祓式」で皇族以下百官に宣下した祝詞が「大祓詞（延喜式〔927 年〕）」です。（中臣祭文なかとみのさいもん、中臣祓なかとみのはらへとも言われます）
　祓物(はらえつもの)を出して、祓戸の神の神威によって罪穢（つみけがれ）を解除(げじょ)する儀式であり、半年毎に恒例のものとしておこなわれるので「二季の祓にきのはらえ」と称します。大祓式で唱えられる祝詞が「大祓詞」(おおはらえのことば)です。

　大祓は六月と十二月の末日に半年間の罪や穢（けが）れを祓（はら）うもので、イザナギノ命の「禊祓みそぎはらえ」が原型です。
大祓詞を奏上して、身体や心（精神）に滞（とどこお）った「汚穢（おえ）」を、ハラエとミソギでぬぐい去ります。「ハラエ」は、大麻（おおぬさ）を用いて祓い、「ミソギ」は水で身体を洗います。

大祓詞は大まかに、天皇の命により祓の神々に、罪、災い、汚穢（おえ）を移し、海原に出て流し捨て去る、という内容です。
「これは天皇の命で実行したために、身に付いた罪、災い、汚穢（おえ）を祓うことで、天皇が（天皇のために働いた）家来たちのために行う儀式のことです。」

送り仮名として使われている漢字は万葉仮名で、約 900 字の漢字で成り立っています。
「祓」の行事は神話にも語られており、もっと以前からおこなわれていたが、大祓詞の成立は平安期以前といわれています。
大きく二段に分かれていて、前段は豊葦原瑞穂国(とよあしはらのみずほのくに)、つまり日本国の成り立ちが語られ（いわゆる天孫降臨説話が語られています。）、後段では「祓」をおこなうと罪穢がどのように消滅するかが語られています。
文体は「宣命体」です。天皇が大衆に降ろした命令ということです。

宣命（せんみょう）とは、天皇の命令を漢字だけの和文体で記した文書です。そしてその文体を宣命体（ーたい）といい、その表記法を宣命書（-がき）、また宣命を読み上げる使者を宣命使（-し）、宣命を記す紙を宣命紙（-し）といいます。

かつて大祓詞は大祓式の参列者に向けて読まれたものでしたが、今日では神に向け奏上するようになりました。

解説：二倍年暦」について
『魏志倭人伝』の伝えられる写本の中には、「五世紀」南朝「劉宋」の史官であった「斐松之」という人物が他の史書を参考にして「注」をつけたものがあります。その中に『魏略』という書からの引用があり、「倭人、春耕秋収を記して年紀となす」という文章が書かれてあります。これについては「年紀」が「年数」を意味するものであり、「春耕」から「秋収まで」を計ってそれを一年としているという意味と考察できます。

「二倍年暦」については古賀達也氏の研究があり、それによれば元々「南方系」の暦と考えられています。たとえばそれは「仏陀」の生没年研究などでも、有力な二説の差として現れています。ひとつは南方セイロン（現スリランカ）の伝承（「島史」と「大史」）や、「パーリ語」で書かれた資料などに基づくもので、「アショーカ王」の即位を「紀元前二六六年」と推定し、その年と「仏滅」つまり「仏陀の没年」との間を伝説により「二一八年間」とし、それにより計算した結果、「仏滅」の年を「紀元前四八三年」と推定したものです。　この「パーリ語」の資料とは『パーリ聖典』などを言い、その中にはその成立がきわめて古いとされるものがあると推定されています。また、この「パーリ聖典」は南方の諸国（スリランカ、ミャンマー、タイなど）に広がっているのが特徴です。
　この「パーリ語」は「サンスクリット語」にきわめて近く、伝説では「仏陀」がこの言語を使用していたとさえ言われています。

　別の説は「アショーカ王」の即位年を「紀元前二六八年」とし、「仏滅」の「一一六年後」に「アショーカ王」が即位したという『十八部論』などに記された説に基づき、「仏滅」の年次を「紀元前三八四年」とするものです。
　つまり、「南方系」の伝説を基にした推論では仏滅後「約二〇〇年後」にアショーカ王が即位した、というのに対し、「北方系」の資料には（インド・中国）では仏滅の「約一〇〇年後」と伝えられていることとなります。　当然これらの現象は、「南方系所伝」が二倍年暦で伝えられ、「北方系所伝」が一倍年暦により伝えられたため生じたと理解する

べきでしょう。つまり「正しい」年次は北方系諸伝である「十八部論」や「部執異論」などの方であるという可能性が高いものと思料します。

　このように「二倍年暦」の始原も南方では非常に古くに遡るものであることが推測されます。　これらのことは「本来」の資料が「二倍年暦」で書かれていた可能性を示唆するものであり、「仏陀」自身が「二倍年暦」の世界に住んでいたことを示唆するものでもあります。　その後「二倍年暦」とは異なる世界に信仰の中心が移った時点以降「一倍年暦」に書き改められたと思われ、それは「アショーカ王」時代を過ぎ、「マウリヤ王朝時代」付近（紀元前三世紀から二世紀頃）の出来事と思われます。この時代は「原始仏教」の分裂時代であり、諸部派で各々異なる解釈などが発生した時期であります。この時点付近で地域に応じて「暦」を変換するということが併せて行われたという可能性が考えられるでしょう。

資料：古代の天皇の寿命 表　　古事記（日本書紀）　〇８０才以上

〇	1	神武天皇	137(127)
〇	2	綏靖天皇	45(84)
	3	安寧天皇	49(57)
	4	懿徳天皇	45(77)
〇	5	孝昭天皇	93(113)
〇	6	考安天皇	123(137)
〇	7	孝霊天皇	106(128)
〇	8	孝元天皇	57(116)
〇	9	開化天皇	63(111)
〇	10	崇神天皇	168(120)
〇	11	垂仁天皇	153(140)
〇	12	景行天皇	137(106)
〇	13	成務天皇	95(107)
	14	仲哀天皇	52(52)
〇	15	応神天皇	130(110)
〇	16	仁徳天皇	83(110)

解説：「古代人の寿命」
縄文人の場合は、３０才くらいと考えられています。これは、貝塚から発掘される骨から確定できるといわれます。
しかし、弥生時代の人骨は発掘されること自体大変少なく、弥生人の骨は土に帰ってしまうといわれます。
縄文人は、貝塚の近くに骨を埋葬しました。カルシウム分の多い土に埋葬された骨は、土に帰らず残るといわれます。
一方、弥生時代は稲作が始まっています。貝塚のようにカルシウム分の多い土には埋葬されなかったので、弥生人の骨は土に帰ってしまったのです。

佐賀県の吉野ヶ里遺跡は有名ですが、発掘された人骨によると、弥生人は渡来系らしい特徴を備えているといわれます。縄文人に比べると背が高く、平均寿命は30〜40歳ぐらい。遺物には紐のついた毛髪もあり、髪を結っていたこともわかります。
（ここでいう３０歳は、１５歳以上生存した人間の寿命です。）

弥生時代は、稲作が生活の基盤となり、鉄器や青銅器の使用が始まった時代といわれます。吉野ヶ里でも農耕によって飛躍的に人口が増加し、人々を統率する王も現れました。一般の墓地とは別に王族を祀る巨大な墳墓がそれを物語っています。
古代は幼児期の死亡率が高く、縄文時代〜弥生時代の死亡率は５０〜６０％という数字も見えます。大正末期に幼児期死亡率が、１５％以上あったといわれますので、大袈裟な数字ではないかと思います。

１５歳以上に達した者の平均死亡年齢の時代変遷は、人口問題研究家の小林和正氏による
縄文時代：男３１．１歳／女３１．３歳
弥生時代：男３０．０歳／女２９．２歳
古墳時代：男３０．５歳／女３４．５歳
室町時代：男３５．８歳／女３６．７歳
江戸時代：男４３．９歳／女４０．９歳
（古人骨より推定）

1891〜98年調査：男５５．７歳／女５７．１歳
1965〜66年調査：男７０．３歳／女７５．０歳

（人口統計）
ちなみに、"平均寿命"とは、「０歳児における平均余命(後どれくらい生きられるか)」ですが、紀元前１１世紀〜１世紀「縄文時代」の日本人の寿命は、男女とも、１４．６歳。紀元前８世紀〜３世紀「弥生時代」３世紀〜７世紀「古墳時代」に入っても、「縄文時代」と、ほとんど平均寿命は変わらず、「室町時代」(1338-1573)では１５．２歳くらいと推定されています。

８．２月はどうでして２８日までなのでしょうか。

ほかの月は３０日か３１日あるのに、なぜか２月は２８日しかありません。
また４年に１回やってくる閏年の調整も２月という中途半端な月に行うのは、どうしてでしょうか。
実は、　「昔　１年の始まりは３月だった。！」
紀元前８世紀頃のローマで使われていたカレンダーは、１０ヶ月しかなかった。
農耕をしない冬の２ヶ月は、暦がなかった。
その頃は、１年の始まりは　March（マーチ）今の３月だった。

ちなみに　８月の September（セプテンバー）は７番目の月で、１０月の October（オクトーバー）は８番目の月と言う意味となっています。タコは足が８本だから Octopus(オクトパス)にといわれています。

その後　January（ジャニアリー）今の１月と February（フェビュラリー）今の２月が創設されて、１年は１２ヶ月になりました。それでも　１年の始まりは３月のままでした。

年始　３月　４月　５月　６月　７月　８月
９月　１０月　１１月　１２月　１月　２月　年末
そこで日程の調整は、年末の２月にすることになっていた。

有名なローマ王のユリウ・スカエサル（ジュリアス・シーザー）の時代に暦が変更されて１月が年始になったのだが、日程の調整は（閏年）２がつのままで現在に続いています。
ちなみに　７月 July（ジュライ）は（ジュリアス・シーザー）の名前からつけられました。
そして８月の August（オーガスト）は皇帝アウグストウスの名前からつけられました。

曜日の順番　「日　月　火　水　木　金　土　」これは、古代のギリシャ人が地球から近いと信じていた順番につけたと云われています。
この時代は、地球を中心に宇宙が回っていると思われていた「天動説」の時代だった。
日本では、明治になるまで、月の満ち欠けを基準にした太陰暦を使っていました。

９．なぜ神無月に神様がいなくなるのか？。

日本では、明治になるまで、月の満ち欠けを基準にした太陰暦を使っていました。
だから　１ヶ月は２８日となります。１２ヶ月で３３６日で、現在のカレンダーよりも３６５日ー３３６日＝２９日　足りなくなります。
そこで閏年ならぬ閏月を設けて、１年を１２ヶ月＋閏月＝１３ヶ月で過ごしていました。
順に　１月（睦月むつき）　２月（如月きさらぎ）　３月（弥生やよい）
４月（卯月うづき）　５月（皐月さつき）　６月（水無月みなづき）
７月（文月ふみづき）　８月（葉月はづき）　９月（長月ながつき）
１０月（神無月かんなづき）　１１月（霜月しもつき）　１２月（師走しわす）

１０月（神無月かんなづき）の由来は、年に１回神様が出雲に出かけてしまって神様がいなくなる。それで神無月です。

出雲では神様が集まって来るので、１０月を神在月（かみありつき）と言います。
どうして神様はみんな出雲に集まるのでしょうか。
天照大神がいる伊勢に集まれば良いのではないかと思います。
どうやらその昔出雲が日本の中心だったのではないか。この疑問がわきます。

神話の中に国譲りという話があります。
高天原にいた天照大神が出雲の神だった大国主命に対して、あなたの国を譲れと命令してその後天孫降臨した瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）が支配した。という話です。

つまりそれ以前は出雲が国の支配者だったが、征服されたという事になります。
大国主命は大きな社（やしろ）、今の出雲大社を造ることを条件として国を譲り黄泉の国の王として今もそこで奉られています。
黄泉の国とは死の国のことで、黄泉の国から帰ってくることを「よみがえる」といいます。

そう云えば出雲大社だけ拝礼の儀式が違います。ほとんどの神社は「二礼二拍手一礼」といって柏手は２回ですが、出雲大社では柏手は４回で、「二礼拍四手一礼」となっています。「四」というのは「死」を連想させます。

平安時代の数え歌に「雲太うんた　和仁わに　京三きょうさん」というのがあって、

雲太うんた

和仁わに

京三きょうさん

雲太は出雲大社、和仁は大和の東大寺大仏殿、京三は京都の大極殿　のことで大きな建物の順番を表しています。大極殿とは天皇の住まいのようなもので王様の屋敷より大きな建物を滅ぼした国の王のために建てる事は、ほかの国では考えられないことです。
ところが日本では、この考えられないことが普通に行われています。

１０．怨霊の祟りを恐れた日本人

出雲大社は現在２４メートルの高さですが、
その昔は倍の４８メートルだった事が記録に残っていました。
誰も信じていなかったのですが、巨大な柱の跡が発掘されました。
今では間違いないとされています。
出雲は後の大和朝廷に征服された国といわれていますが。
なぜ征服された王のためにそんな巨大なものを建てたのでしょうか。

それは怨霊が怖かったからだといいます。
古代の日本では「不遇のまま死んだ人は怨霊になって祟りをなす。」と信じられていました。それを恐れて手厚く祀る習慣が根付いたといわれています。
墓石も元々は死者がよみがえるのを防ぐためという説があります。
天照大神たちにとっては滅ぼした国の王は最も恐れた怨霊だったのではないでしょうか。
出雲大社は、大国主命の魂を鎮めるために建てられた一大モニュメントなのです。

昔の人は、地震も台風も流行病も怨霊の祟だと思っていたと考えられます。
例えば紫式部の書いた源氏物語は、光源氏が主人公の長編恋愛小説ですが、スポンサーは当時の最大権力者の藤原道長です。

光源氏にはモデルがいます。
当時左大臣まで上りつめた源高明（みなもとのたかあきら）です。
二人はライバル関係でした。
最後は源高明は、失脚し不遇な中で死んでしまった。
物語の中では、光源氏が事々に藤原氏に勝利する。
そのため中には、藤原氏に近い紫式部が書いたとは思えないと疑問視する研究者もいるくらいです。でもこれも源氏の祟りを恐れた結果と考えればスッキリします。

藤原道長は源高明に対して「物語の中で存分に活躍させるからどうか祟らないでくれ」と祈ったのではないでしょうか。
源氏物語は「怨霊封じの書」だったのかも知れません。

ところで　源氏物語の作者は紫式部だといわれていますが紫式部は名前ではなく、彼女の本当の名前は誰も知りません。ここに日本人が持っている不思議があります。

解説：源 高明（みなもと の たかあきら）は、平安時代の公卿。醍醐天皇の第 10 皇子。母は源周子。法名は覚念。官位は正二位・左大臣。京都右京四条に壮麗な豪邸を建設し、西宮左大臣と呼ばれた。

一世源氏の尊貴な身分であり、学問に優れ朝儀に通じており、また実力者藤原師輔、その娘の中宮安子の後援も得て朝廷で重んじられた。師輔・安子の死後、藤原氏に忌まれて安和の変で失脚し、政界から退いた。

安和の変（あんなのへん）は、平安時代の 969 年（安和 2 年）に起きた藤原氏による他氏排斥事件。謀反の密告により左大臣源高明が失脚させられた。

１１．誰も知らない「本当の名前」

源氏物語は紫式部、枕草子は清少納言と誰でも知っている平安時代の二大作家です。
しかしこれらは、彼女たちの名前ではありません。
紫は「あだな」で、式部は「朝廷に仕えた女官の役職名です」
清は「父方の性（清原）から」で、少納言は「朝廷内の職を表しています」

二人だけではなく
蜻蛉日記（かげろうにっき）は、藤原道綱の母（ふじわらのみちつなのはは）
和泉式部日記（いずみしきぶにっき）は、和泉式部（いずみしきぶ）
更級日記（さらしなにっき）は、菅原の孝標の女（すがわらのたかすえのむすめ）

など、余程位の高い女性以外は、本名を名乗らない。本名は両親と結婚相手しか知らない。
当時女性に名前を尋ねるということは、プロポーズ（結婚を申し込む）することと同じだった。「名は体を表す」という言葉があるように、名前はその人自身という考えがあり日本には名前を呼ぶのを避ける風潮があります。

今でも役職がある人には、社長、部長と役職名で呼ぶし、普通は、鈴木さん・佐藤さんと苗字でびます。余程親しくないと○○ちゃんと名前で呼ぶことは少ないと思います。
事情は、男性も同じで　基本、本名は名乗らないし呼ばなかった。

明治時代になるまで、本名は「忌み名」と言って、親・兄弟しか知らなかったのです。
そうすると不便なので、そこで呼んでもいい名前「字あざな」を持っていたのです。
幕末の有名人坂本龍馬（さかもとりょうま）の龍馬は字だから皆んな「りょうまさん」と呼んでいた訳です。坂本龍馬（さかもとりょうま）の本名は直陰（なおかげ）でした。

ところが西郷隆盛（さいごうたかもり）の隆盛（たかもり）は本名だったので、彼を隆盛さん（たかもりさん）と呼んだ人はいません。
彼の字は吉之助（きちのすけ）で、みんな吉さん（きちさん）と呼んでいたのです。
それどころか隆盛は彼のお父さんの名前だったのです。
本当の名前は、隆永（たかなが）ということでした。
どうやら明治になってからお父さんの名前と間違えられたのですが面倒だからそのままにしておいたといわれています。
それくらい本名はまわりに知られていなかったということになります。
こうした名前の不思議は日本人が古来から持っていた「言霊思想ことだましそう」に根付いているといわれています。

１２．日本人は今も言霊に縛られている。

言霊信仰というのは、文字通り「言葉に魂が宿っている」、言葉を変えて言うと「言葉にしたことは現実に起こると信じていること」となります。
みなさんは、「それは昔の話で現代人はそんな信仰はない」と、いうと思いますが。
ところが現代人も言霊思想は強く持っていると思います。
例えば、受験生の前で「すべる」「落ちる」なんていわないし、ハレの結婚式で「別れる」「こわれる」なんていわないと思います。縁起が悪いといいます。
これこそ「言葉にしてことは現実に起こると信じている証拠」といえます。

そのため縁起の悪い言葉をいい換える習慣があります。
パーティの終了は「お開き」、するめは「あたりめ」、鏡割りは「鏡開き」、刺し身は「魚の切り身は身を切るようで縁起が悪いといい換えられたました」、映画のことを「キネマ」といいますが、元々のシネマが「死ねま」に似ているのでいい換えられました。
現代人も「言霊」の中に生きています。冗談で君は受験に失敗するといって、本当に不合格になってしまったら「俺があんなことをいったばかりに」と後悔するに違いありません。

冷静に考えれば「受験に失敗する」といった事と本当に不合格になったことに因果関係はありませんが。それでも人は後悔の気持ちになります。言霊です。

古代の人はもっと言霊にとらわれていました。
言葉にしたことが、現実に起こる訳ですので、当時の政治家（貴族）の仕事は「和歌を詠む」ことだった。「平和になれと詠えば、平和になる」「豊かになれと詠えば、豊かになる」のだから簡単です？。
８世紀中頃に成立した万葉集は、世界最古の歌集です。
また竹取物語も世界最古の物語といわれています。
これらも全て「言霊」の成せるワザです。

言葉にすると現実のものになってしまうというので、日本人は「言葉を慎重に発する」ようになった。「沈黙は金」「目は口ほどにものを言う」なんて考え方も言霊思想から生まれたのではないでしょうか。おかげで現代の日本人は、世界から「何を考えているのかわからない。」とか「自己主張しない。」とかいわれたりもしています。（了）

参考資料
・卑弥呼の謎(19721024) 安本美典（やすもとびてん）　講談社現代新書
・邪馬台国はなかった(19771010)　古田武彦（ふるたたけひこ）角川文庫
・風土記にいた卑弥呼(19880420)　古田武彦（ふるたたけひこ）朝日文庫
・逆説の日本史１～４ (19980101)　井沢元彦（いざわもとひこ）小学館文庫
・倭国伝（20100913:中国正史に描かれた日本）、藤堂明保・竹田晃・影山輝圀、株式会社講談社
・別冊宝島 2465（20160627:古代史再検証邪馬台国とは何か）、瀧音能之、株式会社宝島社
・新訂古事記　現代語訳付　武田祐吉訳注　中村啓信補訂　角川ソフィア文庫
・日本書紀上下　全現代語訳　宇治谷孟（うじたにつとむ）、鈴木哲、株式会社講談社
・続日本紀　朝日新聞本（全十二巻佐伯有義、朝日新聞社、昭和 15）三・四を体系本・諸本で補訂
・その他ネット検索　（了）

hiroshi.ishiyama のページ「日本古代史の謎」もご覧ください。
http://www.asahi-net.or.jp/~wy4h-isym/index.html

日曜に想う　　編集委員　福島中二　　朝日新聞２０２０年5月２４日（日）

「言葉」に逆襲される首相

本腰を入れたものより、戯れのようにやっていたものの方が後世に残ることがある。たとえば久保田万太郎は本業の戯曲や小説より、「余技」だと言っていた俳句によって今はよく知られる。
＜湯豆腐やいのちのはてのうすあかり＞

アベノミクスよりもアベノマスクの方が後々、人の記憶に残ると想う。片や長期政権の屋台骨をなす政策であり、もう一方は側近官僚の思いつきとされる。だが巷の秀逸なネーミングも相まって、冗談めいた奇策と、首相ご当人の着装の印象はなかなかシュールだ。

むろん万太郎の句はすぐれているから名が残るのであり、不人気なマスクとは逆の話。ともあれ窮屈なマスク顔で、あるいはマスクを外して、首相は様々に語りかける。しかし言葉が心に響いたという話はあまり聞かない。

言葉を弾丸にたとえるなら、信用は火薬だと言ったのは、作家の徳冨蘆花だった。火薬がなければ弾は透らない。つまり言葉は届かない、と。数を頼んで言葉への横着を重ねてきた首相に、もはや十分な火薬があるとは思われない。弾も自前ではなくて大抵は官僚の代筆である。

丁寧、謙虚、真摯、寄り添う、と言った言葉をさんざん「虐待」してきたのはご承知のとおりだ。いま、危機のときに言葉が国民に届かず、ひいては指導力が足りない不満を呼ぶ流れは、言葉に不誠実だった首相が、ここにきて言葉から逆襲されている図にも見えてくる。

（中略）

家ごもりの一日、版元から頂戴していた梶谷和恵さんの詩集を手に取った。巻頭に置かれた「朝やけ」と題する３行の短詩に、いきなり引き込まれた。

どうしよう、
泣けてきた。
昨日は　続いている。

明けゆく空を見て湧く感動とも、昨日をリセットできない屈託とも読める。
後者と想像すれば、今の多くの人の心情表しているかのようだ。コロナ禍の緊急事態宣言が解除されても翌日すべてが変わるわけではない。長期休校が続く子、収入の絶えた人、資金繰りに悩む経営者誰もが事情を抱かえながら閉塞感のなかで次の朝を迎えている。
第二波への恐れも社会を陰らせている。

そうした状況に向けて、強い言葉をよく繰り返す。「躊躇なく」は連発ぎみだし、ほかにも「積極果断な」「間髪を入れず」「一気呵成に」など色々ある。
「力の言葉」を、「言葉の力」だと勘違いしてはいないか。

川を渡る途中で馬を替えるな、は危機を乗り切る常道だ。しかし「コロナ後」という時代の創出は、新しいリーダを早く選び出すかどうかの選択から始まろう。すべては民意にゆだねられる。